

高山 倫明 (国語学・国文学)

## 日本語音韻史の方法

本論文は、清濁・アクセントなどのプロソディに関わる諸問題を中心として日本語音韻史のありかたを再考しようとしたもので、第Ⅰ部「研究史と方法論」、第Ⅱ部「分節音論」、第Ⅲ部「韻律論」の三部から構成されている。

日本語の「清濁」は、現代では有声・無声の対立と考えられているが、中世以前は、非鳴音（阻害音）における非鼻音・鼻音の対立と考えるべきであるという。中世末に日本に来ていた宣教師たちの日本語の観察記録、具体的な日本語の語形変化、東北方言などの現代の方言の状況などを総合すると、古い時代の日本語の清濁は、声帯振動の有無による対立ではなく、「濁音」が入りかわりに微細な鼻音（前鼻音）をもっていて、清濁の対立は、この前鼻音の有無によっていたと考えられるという。そうであるなら、日本語の高低アクセントが狭義の音韻の上に音量の差を付加的に加えたというのと同じく超分節的性格という共通点を持っていたことになる。そこで本論文は、清濁とアクセントをここでひとくくりにし、この特異な分野を通して「日本語音韻史の方法」を掘り下げようとしたものである。清濁については、第Ⅱ部「分節音論」で、アクセントやそれを担う音節単位に関連する問題については第Ⅲ部「韻律論」で詳細に検討を加えている。

第Ⅱ部の清濁については、中世を境に「清濁」という用語で捉えられる内実が大きく変わったことをこれまでの研究が十分に認識していなくて、現代と同じ有声・無声の対立と考えて立論していることを指摘し、このことに関わる多くの事象をあらためて検証しおしている。いわゆる連濁の問題もその一つで、かつては規則的・法則的に起きていた連濁が、後世、個別的・語彙的現象になったとされることが多かったが、これは、鼻音が関与する濁音化（連声濁）と形態音韻論的ないわゆる連濁を混同した歴史認識で、中世以降衰微した連声濁といわゆる連濁とは区別して考えるべきとする。また、現代中央語で促音に濁音が後続しないという制約が見られるが、ここには音声学的必然性はなく、濁音が前鼻音をもっていた時代の配列規則の再開積の結果が今に残っているだけだとする。いわゆる四つ仮名の混乱過程の論議に必ず言及される前鼻音についても検討を加えている。

第Ⅲ部「韻律論」では、森博達氏によって明らかにされた日本書紀歌謡及び訓注に見られる音仮名分布の巻による偏りに関連して、森氏が $\alpha$ 群と名付けた巻における字音仮名の一部の使い分けが日本語のアクセントと対応しているのではないかという論者による画期的な発見があらためて慎重に検証されている。日本語のアクセント史はこれまで平安時代までしか遡ることが出来なかったのであるが、このことによって、奈良時代のアクセントを考える手掛かりがはじめて得られたことになる。この第Ⅲ部では、日本語の音節構造に関わる現象として注目されてきたいわゆる和歌における字余りの問題もとりあげ、これは日本の歌のリズムが古来基本的に四拍子であったことと関係するもので、音節構造などとは無関係な現象であるとする。

以上、清濁、アクセントなどのプロソディックな面を中心に方法についての厳格な反省を示しつつ、新しい概念、事実の提示をしてこの方面の研究の進展に大きく貢献している。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力をもつものであると認めるものである。